

一九七七年二月一〇日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

e-mail: shakaisushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポル幢ケ谷九〇四 電話 03) 3377-4649

FAX 03) 32299-5367

振替 〇〇一〇〇一九一五八四三二 労金 中央労金本店 No.1154163

購読料 月額 700円

6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言

レベル7は続いている

原野人……2

破綻した糊塗策に代えて何が必要か

二人の偉人 性格と人柄

伊勢 太郎……3

—マルクス、エンゲルスの「告白」—

エンゲルスの『空想より科学へ』を学習するに当たって

鈴木 賢二……5

—伊藤誠先生の、恐慌感と今後の見解について—

反動の嵐のなか 大きな勝利(豊後大野市長選)

滝野 忠……7

—赤峰さん 市長選、県議選に大活躍(下)—

安全の大合唱、国鉄分割民営化のツケ

……10

—JR三労組、そして私鉄総連 組合大会から(三)—

国鉄分割民営化のツケ

松里 福慈……11

—JR北海道 事故多発の真因—

読者からのおたより……

……14

旬刊 社会通信

NO. 1152

二〇一三年九月一五日号

二〇一三年九月一五日発行
(毎月一日・一五日二回発行)

レベル 7 は 続 いて いる

破綻した糊塗策に代えて何が必要か

本誌でもたびたび指摘したように、事故原発の実態からも、魚汚染のデータなどからも、東電福島では高濃度汚染水が溢れ、複数のルートから海に漏れ出ていることは明らかだった。にもかかわらず、参院選が終わるまでは、原子力マフィアとその政治部は隠し、些細なことのようにごまかしてきた。しかしここまで来ると深刻さを表明せざるをえなくなった。だが今さらレベル1だ、いやレベル3だなどと言ってみても始まらない。レベル7の事故が終息しないまま続いているのだから。

建屋地下に流入する日に四〇〇トン以上の地下水が、上から落ちてくる循環冷却水によって汚染されているだけではない。それがトレンチ（地下トンネル）等を通して海に流出しているだけではない。格納容器の底もぬけてメルトスルーした核燃料を、地下水脈が直接になめて、海に流れ出ている可能性も大きいのだ。

日に四〇〇トンもの処理水（セシウムの大半だけは除去）を収めねばならない仮設タンクも火の車だ。安上がりの応急的タンクでは、漏れ出すのも当然である。

東電、政府、経産省、旧安全・保安院、原子力規制委員会・規制庁がよしとしてきた対策は糊塗策でしかないことがいよいよ明白となった。この延長線上では大量の高濃度汚染水を海に流出させるしかない。

我々がかねてから指摘してきた通り、原子炉建屋を遮蔽して、地下水の流入・流出を遮断することが不可欠なのだ。今さら周囲上流の凍結策を考えているようであるが、少なくとも何十年もかかる廃炉工程を考えれば、これも良策でないことは明らかである。何本かの井戸を掘って流入を減らそうなど、論外だ。

建屋を地下水から遮蔽すると工事に時間がかかる。それまで増える汚染水には、当初のような溶接型タンクを増設するべきである。時間がかかるといっても、費用を惜しまず多くの企業と熟練労働者を加えて建造すれば、溶接型にもさほどの時間は要しないはずだ。当面は間に合わないのなら、せめてもっともなパッキンを使い、底部にも水位計にも費用を惜しまないタンクを仮設として増設するしかない。

第一原発の敷地がいつぱいになっても、第二原発の敷地がある。それだけでなくその両者の間をはじめ近辺の、本当は人が住むべきでない土地は、東電が、それが無理なら国が、適正な価格で買い上げ、そこにタンクを増設していくべきである。

すでに高線量被曝が強いられて作業員が不足する事態である。原子炉と格納容器とを解体撤去する構想は廃棄して、ここに半永久的に管理保管してゆくべきであり、そのためにも地下水からの遮蔽は不可欠である。

山岳の多い日本では、どこも原発の敷地にも地下水脈が海に流れる。過酷事故によって汚染水が流出する危険性はどの原発でも同じである。原子炉建屋を遮蔽することもなく再稼働させるなど、決して許されてよいことではない。

(原 野人)

二人の偉人 性格と人柄

―マルクス、エンゲルスの「告白」―

マルクスとエンゲルスの往復書簡は一八四四年十月はじめの「エンゲルスからマルクスへ」から、一八八三年一月一日付の「マルクスからエンゲルスへ」まで一五四六本にのぼっています。エンゲルスが「商家畜」から解放され、マンチェスターからロンドンのマルクス住居近くに移ったのは一八七〇年でした。これ以降、マルクスとエンゲルスは毎日のように意見を交換したのでした。

写真はマルクスがズングリとした大きな身体にイカツイ頭がのっかっているのに、エンゲルスはキャシヤな身体に小さな頭がのっかっています。マルクスとエンゲルスの性格は大変違っていたようです。『マルクス伝』(三四〇〜一頁)にこうあります。

分業そして協業

「エンゲルスは、マルクスに比較すると全体としてずっと軽快であり、多方面であり、享樂的であつたらしい。マルクスよりずっと感じやすいかわりに、そのなおり方も早かつたといわれている。頭脳のはたらかしも早いかわりに、ぐっと掘り下げの点において、マルクスにおよばなかつた。『新ライン新聞』時代、マルクスは一つの論文を書くにも苦心惨憺一晚中苦しんでいることがあるといわれるが、エンゲルスは、各地方からの報告をいち早くキャッチして、すぐ論文をまとめたといわれている。短い期間の見透しについては、エンゲルスの方が早く、かつ的確な判断を下したが、比較的永い見透しはマルクスの深刻な考察をまつたとある。この意味でも二人はきわめてよい調和を保つた一つの二重唱をなしていたといつてよい。

学問上の労作において、政治上のできごとの判断の上に、運動上の指導において、この二人の性格の相違が絶好のコンビネーションを示していた。たとえば、『資本論』の著述についても、抽象理論と実際との結びつきに関して、いかにエンゲルスの力に負っているかは、彼らの往復書簡集からだけでもわかる。」

「エンゲルスには多方面にわたつて、その精髓を巧みにキャッチしてゆく才能とともに、その生活のどこかに明朗さがある。一八四八年の社会的動乱の中にあつても、この明朗さを失わない。マルクスとともに緊張した生活のさ中にありながら、なお閑日月を見出して享樂することを忘れない。一八四八年エンゲルスが一時国外に亡命しなければならなくなつて、フランスからスイスへ逃れ歩いている間にも、ゆうゆうとしてフランス農民の間に生活し、葡萄酒に陶然となることを忘れたかつた。

こういう享樂的な自由な生活を好んだエンゲルスは、したがつて、いっさいの形式的なことがきらいであつた。彼の事実上の夫人は、アイルランド系の無学な、しかし、彼を『心一杯愛していた』労働婦人であつた。彼らは法律上の形式をふんだ夫婦ではなかつた。」

発見

マルクスとエンゲルスの性格をよく示す「告白」を見つけました。マルクスの『告

白』は向坂先生がよくとりあげていましたから、知らない人は少ないと思われる。エンゲルスにも「告白」があった、往復書簡を読んでの発見でした。二人の「告白」を掲げてみます。どうですか。たいへんおもしろいでしょう。

カール・マルクス

フリードリヒ・エンゲルス

あなたの好きな徳目

素朴

陽気

………男性の場合

力

自分の職分をまもること

………女性の場合

弱さ

物を置き違えないこと

主たる特徴

目標への没頭

半可通

幸福観

軽信

一八四八年産のシャツ・マルゴ

不幸観

卑屈

歯医者にゆかねばならぬこと

あなたが許せる悪徳

軽信

あらゆる種類のやり過ぎ

………嫌悪する悪徳

卑屈

偽善のことばづかい

嫌いなもの

マーティン・タッパー

気どった、高慢ちきな女性

あなたがもつとも嫌いな人物

すみれ色の白粉

スパージャン

好きな仕事

本の虫

からかいあうこと

………ヒーロー

なし

………ヒロイン

あまり多すぎて一人だけあげるわけにいかない

………詩人

ダンテ、アイスキュロス

ライネケ狐、シエークスピア、

………著述家

シエークスピア、ゲーテ

アリオストなど

………英雄

ヘーゲル、バルザック

ゲーテ、レッシング、ザーマル

………女の英雄

スパルタクス、ケブラー

ゾン医師

………花

グレートヒェン

野生ヒヤシンス

………色

じんちようげ

アニリン色素をのぞくすべての色

………眼と髪の色

赤

野生ヒヤシンス

………名まえ

黒

冷たいものではサラダ、熱いものではアイルランド・シチュー

………料理

ジェニー、ラウラ

なにもなし

………あなた

魚

冷たいものではサラダ、熱いものではアイルランド・シチュー

………あなたが最も嫌いな歴史上の人物

魚

冷たいものではサラダ、熱いものではアイルランド・シチュー

………格言

人間的なもので私に無縁なものはない [Nihil humani a me alienum puto]

冷たいものではサラダ、熱いものではアイルランド・シチュー

………モットー

すべては疑いうる [De omnibus dubitandum]

気楽にいこうぜ

エンゲルスの『空想より科学へ』を学習するに当たって

―伊藤誠先生の、恐慌感と今後の見解について―

私の教師 伊藤誠著『日本経済はなぜ衰退したのか・再生への道を探る』（平凡社新書）、これは最近、伊藤先生が出版された読みやすい新書版の本です。伊藤先生の恐慌に関する見解や、今後左派は何をなすべきかについて先生自身の考えをまとめられています。先生は私達のまわりの理論家グループに大変影響力をもっています。毎年の旗開きでは先生の講演が行われています。

伊藤先生は、私（鈴木）の大学院時代の指導教官でありましたし、修士論文の執筆や審査ではお世話になったので、あまり批判めいたことは書きたくないのですが、私なりに少しコメントしたい。

恐慌 特に、私達は今年度、エンゲルスの『空想より科学へ』を使って勉強、これには資本主義社会の業病、あるいは、遺伝子として「恐慌」があることを学んできたわけです。もちろん恐慌発生については、過去と現在の現れ方は違います。例えば、一九二九年一〇月二四日にニューヨーク証券取引所で株価が大暴落したことを契機として世界的な規模で各国の経済に波及した金融恐慌、「暗黒の木曜日」(Black Thursday) として知られています。生産がストップし銀行の取り付け騒ぎや失業者が巷に溢れる状況が現れた。

今日の恐慌では、そうした極端な状況は現れない。従って恐慌は無くなったと思われるがちです。しかし、恐慌そのものが無くなったわけではありません。恐慌に対する国家の対応方法も大きく変化し、あたかも恐慌ではなく、特殊な不況・あるいはデフレと思わせる思想攻撃や世論操作もマスコミ報道をつうじて大きく進化しました。ただし、恐慌が無くなった訳ではありません、もし恐慌がなくなったとすなら、マルクス主義を学ばなくて良いことになります。

私は戦後、日本の恐慌発生は五回あったと考察しています。第一回目は、東京オリピック後の一九六五年恐慌で、この年に始めて赤字国債が発行されています。

二回目が、一九七三・四年の石油危機と言う名前の恐慌です。これは私鉄京成の倒産事件とも関係しています。

三回目が、一九九一年からのバブル崩壊という名称の恐慌でした。四回目が、アメリカ発で日本にも大きな影響を与えたサブプライム恐慌。そして五回目が、サブプライムの影響を受けて発生した、リーマン・ブラザーズ投資銀行倒産に端を発した恐慌の五つです。伊藤先生は、サブプライム恐慌とリーマン恐慌の二つは恐慌と規定していますが、他は「経済危機」などの曖昧な規定です。

そしてこの経済危機発生の原因を、労働者の賃金が上がら資本家の利潤を圧迫したから経済危機になったと各所で展開しています。しかし、当時的大幅賃上げにしろ、インフレ等で生活は苦しく精一杯の力を尽くして資本と闘い勝ち取ったもので、それが経済危機の原因とはどうして私などは考えられません。

原因 前掲書六一頁、第二章「世界経済危機の構造」の箇所、「こうして、一九七〇年代初頭に資本主義先進諸国に生じた労賃騰貴による利潤圧縮にもなう経済危機への反動として、労働力商品の需給調整の困難が、新自由主義とそのもとのIT合理化の進展をも介して、不況の長期化と相対的過剰人口の大規模な再形成ともたらしていた。」

および同書一一七頁、第三章「深まる日本経済の衰退」に、「一九七〇年代初頭における労働力商品の供給制約に対する資本の過剰蓄積の結果、生じた利潤圧縮による経済危機への反動として、その後の低成長、さらに超低成長への転換の過程をうじて、IT『合理化』をすすめ、安価に動員可能な産業予備軍の大規模な再形成が、さまざまな側面から進展する事態が存続していた。」と書いている。

この意味するところは、一九七三・四年の石油危機（石油危機と言う名前で発生した恐慌：鈴木）について、一般的には曖昧な「スタグフレーション」等と呼ばれインフレとデフレが一緒に表れたと、多くの経済学者が語っていたのですが、我が伊藤先生は大幅賃上げ（労賃騰貴）がこの経済危機の本質と捉えています。

この書全体では、資本主義の高度成長時代を国家独占資本主義の時代であり、当時を、社会民主主義的社会、社会福祉型資本主義であったが、この賃上げをきっかけに、一九七〇年代後半から八〇年代初頭にかけて、サッチャー・レーガン・中曽根による「新自由主義」資本主義に変化し、ITやMEによる大がかりな合理化、労働政策の改悪、労働組合潰し、資本の金融化、産業のグローバル化などになったとしています。

「再生」 日本経済「再生」への戦略課題、として以下のように提案しています。

「二〇世紀の社会民主主義は、資本主義経済のしくみのなかで、労働組合を主要な推進母体とし、国家による社会保障や福祉政策による所得再分配政策に期待を寄せ、経済生活の安定化と平等化に一定の成果をあげてきた。

この戦略方針にケインズ主義も接合されて、国家財政・金融政策による完全雇用の実現も重視された。マルクス学派のなかでは、国家独占資本主義論として、こうしたケインズ主義的社会民主主義の歴史的意義を考察する試みも示されていた。

しかし、高度経済成長期以降に生じてきた経済危機と再編の過程で、労働運動が弱体化され、国家の財政危機が深化するとともに、先進資本主義諸国の支配的政策基調は新自由主義にとつて代わられた。

その結果、社会的規制や再分配政策から解き放たれた資本主義市場経済の自由な作動をつうじ、経済生活はサブプライム恐慌のような災厄を生じ、不安定で、不平等な秩序にゆだねられることとなってきた。」（同書一八九頁）

これに対抗する戦略としては「二一世紀型社会民主主義は、：広く新自由主義に対抗する代替的経済戦略として：二〇世紀の社会民主主義の基盤や特徴を大切に継承し、再興する課題を追求し：推進母体として労働組合運動にとどまらず、地域コミュニティに根ざした各種の協同組合運動、NPO、NGOなどの相互扶助的連帯運動にも基盤を：日本経済を『再生』するためにも示唆に富む、グリーン・リカ

バリー戦略、ベーシック・インカム構想、および地域通貨の理念と実践について」検討することが大切としています。

現代社会 私は伊藤先生の考察は、大いなる勘違いからきていると思います。それは、現代社会は新自由主義でも何でもなく「国家独占資本主義」そのものだと考察しているからです。高度成長時代もそうでしたし、今日も全く変わっていません。当時よりもっとも「国家」と「独占資本」が総力を挙げて度重なる恐慌を克服するため、強力にあらゆる方法を屈指し協力し国家運営を実践している姿にほかなりません。「アベノミクス」しかり、グローバル生産体制しかり、労働の規制緩和しかりです。まさに現在の資本主義が「国家独占資本主義」の追い詰まった姿なのです。それを「国家独占資本主義」の時代に返すことを戦略目標に掲げるとは如何なものであるかと、私は疑問に思います。

さて次には、黒田日銀総裁のジャブジャブ論は、如何に危ういかについてです。日銀がお金をどんだん出して市中銀行の国債などを買ってくれるなら他に流動出来る資本が大量に発生します。

株価があがれば銀行など金融機関は国債を売って株に投資します。しかし、怖いのはこの国債の売りです。売りは国債の価値が下がります。すると金利があがります。この金利が上がるのが国家財政破綻への一歩になっていくのです。

サブプライム恐慌の時もそうでした。デリバティブ「金融商品」が一旦不穏な情報が出ると、この提灯につられて大量な売りが発生します。この売りは「金融商品」の価値を大幅に下げます。すると金利は大幅に高くなり、返済不能に陥るのです。

日本の国債は日本の資本家や個人資本が持っているから大丈夫とする意見もありますが、世界で動いている金融商品の売買で動く金融資本は、五京六四〇〇兆円（国際決済銀行BIS統計）以上に達しているようなので、いっどうなるか油断は出来ません。日本の金利も1%近くまで上がったと報道されていました。（鈴木 賢二）

反動の嵐のなか 大きな勝利（豊後大野市市長選）

― 赤峰さん 市長選、県議選に大活躍（下） ―

赤峰さんの活動 赤峰さんは多くの同志・友人とともに県議、市長選挙に力を尽くしていらつしやる。自民が天下のこの地域で反・非自民の県議に二人（定数二）がとおり、市長さんは市民運動を先頭にたたかった橋本ゆうすけさんが四年前にはたった一三二票差、今年四月の市長選は四四〇七票の大差で当選。「こんな田舎町で自民候補がなぜ負ける」と、産経他の新聞社が取材にきたとか。

市長選をたたかった橋本さんに、自民、民主、労働組合が自治労出身の対立候補を擁立。橋本さんは大勝利が内容だ。こんな例が首長選で昨年の衆院選から相次いでいる。地方・地域で反・非自民が大きな流れとなっている予兆であろう。以下は、市長選の総括文書を編集部が要約したものです。

初当選は 132票差 二〇一三年四月一日日に実施された豊後大野市・市議・市長選挙の総括にあたっては、前回の二〇〇九年市長選挙を振り返り、そこからの連続性を意識して総括する必要があります。

平成の大合併に伴い「まち」からは、振興局・高校・病院が統廃合されるなど弊害が次々と噴出しました。その一方で「新庁舎建設」や「ケーブル事業」等一〇〇億円規模の公共工事が、住民に対する説明が不十分のまま実施されようとしていました。そのような市政（当時の芦刈市政）に対して反対する住民運動がおこりましたが、まったく市政には反映されず、市民の不満は高まるばかりでした。

二〇〇九年における市長選挙の争点は、次の一点に絞られていたと言っても過言ではありません。市民が求めたことは、「住民不在の行政を変える」でした。そして、私たち労働者が求めたことは、「押し付けの組織決定からの脱却」といえます。いずれも「上意下達」の一方的な行政運営や機関運営を正し「生活者の視点に立った市政」を求めて闘われた市長選挙であったといえます。

選挙は勝つことによってしか主張の正しさを証明することができません。力なき複数者の決意を前提に、大きな困難を乗り越えなければ、目的を達成できませんでした。当然、その過程では「誹謗中傷」や「統制処分」という具体的な圧力が繰り返されました。特に、労働組合においては、連合が現職の「芦刈幸雄氏の推薦」を、平和センタ―が新人の「橋本祐輔氏の推薦」を決定するという矛盾した状態は、少なからず組合員に動揺を与えました。

「官僚自治」対「住民自治」 「閉鎖的な市政」と「開かれた市政」を問うた選挙戦は、言い換えれば「官僚自治」と「住民自治」の闘いでした。「自分たちだけの権益を守る」官僚体質は、なにも霞が関だけにあるものではありません。偽善的な労働運動を安全弁にする「労働組合」が、どれだけ日本をダメにしているのかを意識できない組合幹部は、社会の存在悪となっております。

橋本祐輔氏の決意は、組織された労働者よりも「格差社会」の底辺に放置された人々に支持されたといえます。芦刈幸雄氏（当時の現職）は、橋本氏の三倍の地盤と「連合&自民党推薦」という矛盾を振りかざしたあげく「一三二票」という僅差で敗れました。この票差が、私たちに何を教えているのか？ そのことが、改めて問いなおされた選挙が、今回、二〇一三年豊後大野市長選挙でした。

今回は4407票差の勝利 前回の市長選挙では「一三二票差」という大激戦でした。今回は、一期四年の橋本氏の実績が、有権者に認められた結果として「4407票差」という文句なしの大差につながったと判断します。平和センター加盟の単産・町労評として闘った近年の選挙戦では、あらゆる面で評価に値する選挙戦を展開し結果を出すことができたかと判断します。

「一メートルからの民主主義」 いずれにしても、今回の選挙結果が示すように両者の票差が「4407票」という大差で勝利できたことは、私たちが推薦した候補者に対して四年の実績と政策について豊後大野市民の圧倒的多数が、同様の評価をしてい

ただいた結果でもありません。

選挙戦の序盤から「政策対立が見られない。大義のない選挙。」という声が、市民の多くから聞かれていました。挑戦する側が最後まで「大義」を示さないままに、現職に対する「誹謗中傷」に終始したことによって、候補者としての資質が問われた結果だともいえます。

この選挙戦で、私たちが各町に選挙事務所を構え「単産縦」と「町労評横」の選挙態勢を構築し選挙戦術を行使した結果、新票で約一万五〇〇〇票（ダブル含む）を出すことができました。私たち総合選対の集票能力は、後援会（約一万六〇〇〇票）とほぼ同等の力を有していたと判断することができます。

これまでの選挙戦は、「革新」対「保守」という構図の中で、組合を中心とした革新勢力と業者・団体（利権）を中心とした保守勢力が争う構図が定着していました。過去には、緒方町や三重町で私たちが推薦する革新首長を誕生させた歴史もあります。が、ここ二〇数年、そのような主張や理念の対立構図は消えました。特に首長選挙においては、私たちが候補者を擁立することもできず、保守同士が争う構図に組合が「便乗する（させられる）」形を取らされていたと言っても過言ではありません。従って推薦したはずの首長が、私たちの意見を尊重せず、住民不在の行政運営（政治姿勢）をする姿を幾度となく見せられ、水面下では矛盾が蔓延していました。

そうした市政を変えようと私たちが擁立した橋本祐輔氏は、政治信条に「一メートルからの民主主義」を掲げ緒方町議時代から平和センター政治連盟に加盟していました。反戦平和・護憲・反原発・人権擁護等々において、私たちの運動理念と何一つ相違するところはありません。このような政治理念を持つ橋本氏が、市民の過半数から支持され勝利したことは、私たち労働組合にとっても大変に意義深いと考えます。

世間では、ここ数年の間に自民党政権から民主党に政権交代したかと思えば、その民主党は、稚拙な政権運営で国民から支持を一気に失い、また自民党が復権と保守層が政権を「たらい回し」している間に、社民党などの護憲政党は消滅の危機にさらされています。

政治闘争の正しい道筋 一九八〇年代以降の労働運動（総評・社会党ブロック）は、「中曽根臨調行革」の圧力に屈した形で「労働運動の再編」と偽り「労使協調」を基軸に据えた「連合運動」に埋没していきました。やがて、財界や民主党をパートナーと位置付けた運動は、支持政党の中心に「民主党」を据えて大手民間企業や公務員のためだけに存在し中小・未組織労働者は、組織対象から外されていきました。

しかし、衣は剥がれ真面目に闘ってきた現場の組合員や支持者から信用を失い、選挙のたびに弱体化していきました。残るのは肥大化した「自民党」と「改憲への道筋」だけです。労働組合や政党幹部が、社会的・政治的な総括を怠り責任を負わず保身に走り続けた結果です。

そんな日本の政治状況下において、九州の一地方の首長選挙とはいえ、体制や利害団体に属さない候補者が、有権者の民意を得て過半数を制することがなぜできたのでしょうか。今回の豊後大野市長選挙は、ある意味で労働組合が歴史的に求め成し得な

かった政治闘争の正しい道筋と答えを示しているのかもしれない。それは、既存の組織に縛られず自らに正直であること、候補者の姿勢が人々に親しまれ支持されただけのことであるという、意外と簡単な答えなのかもしれない。

“安全”の大合唱、国鉄分割民営化の“ツケ”

— J R 三労組、そして私鉄総連 組合大会から (三) —

司会 車偏の J R 三労組、私鉄が大会を終えた。特徴はなんだったか。

C 車偏の産業は人やモノの場所の移動を商品とし、地域・全国で足をになう。速く、その下に安全・確実。資本の論理である「時は金なり」を地で行く産業だ。だから、安全が強調される。この安全を脅かすのが競争激化と規制緩和。安いがなによりと LCC (格安航空、都市間高速ツアーパスが幅をきかず、また速いがなによりと航空会社、鉄道会社、高速バスが覇を競い合う、東京―名古屋を四〇分で結ぶというリニア参入も現実化した。

こんな中で車偏労働者が直面する最大の問題が要員不足、長時間労働、資本はそれを二十四時間の労務管理と労働強化でしっている。交通労働者は疲れ切っているとの印象だ。私鉄総連は組合員を大事に下から組合強化をはかる、もつともすばらしい組合だ。その証明が職場新聞、ポスター、かべ新聞、漫画に写真といったような文化活動に力をつくしていること。こんな川柳があった。「頑張る為に 休みを寄こせ」、「九条と小使だけは 守りたい」。

B ソレおもしろい。そのとおりだ。私鉄らしいね。しかし労働時間の要求はともかく、要員要求は「交渉ならん」と放棄しているのが現状のようだね。車偏組合に限らないが。賃金要求も平均方針から個別要求への流れが強くなっている。

C おつしやるとおり。公共交通、国民の足、交通基本法を政策要求の柱と掲げるが、実現は容易じゃない。とにかく私鉄はガリバーの本州三社との間で猛烈な競争にさらされている。私鉄最大手の東急売り上げは約一兆円、J R 東は二・七兆円だ。

私鉄のスローガンは「議論と実践 未来を見据えた産別運動 組織の力が私鉄の力」。発言者は三十七人にも。議論の焦点は一二年のツアーバス事故、長時間労働、春闘では中央集団交渉を再構築せよ。労働条件、とりわけ賃金、要員に大きな関心との印象だ。

司会 J R 三労組はどうだった。

C 国鉄分割・民営化のツケ「安全より儲け」が J R 北海道を直撃した。だから、安全の大合唱。しかし、「安全は労使の枠を超えた課題」とのとなえ方のようだ。もう一つは本州三社と三島・貨物会社の格差拡大。東は平均年齢四一・七歳で基本給三四万三四〇〇円、年収六七〇万とのことだが、貨物は年収四〇〇万台とされる。とくにポナスは東五・五一ヶ月にたいし、三・一七ヶ月。

B 労資は「安全」をめぐるもつとも対立するのにな。

C 三労組の焦点は組織問題だ。J R 連合は「J R からの革マル追放 (J R 総連) と J R 労働界の一元化」を強調し、国労には「一〇四七名問題解決で求心力を失った。その矛盾を国労組合員に訴え、組織拡大をはかる。」との方針だ。

J R 三労組の力関係は J R 連合が東海、西、四国、九州で組織率九〇%超、組合員七万九千人なのに、J R 総連は北海道、貨物、最大会社の東で少数、組合員七万一千人という事情がある。国労は一万二千人、組合員の多くが東に属する。こんな事情がまた組織問題を複雑にしているとも考えられる。

司会 国労大会で常に話題になるのが「連合に加盟するんじゃないか」との心配。これはどうだったのか。

C 方針案は①全労協とは課題別共闘の原則に基づき取り組みを強化、②連合、全労連とは一致する要求・課題で連携を追求するというもの。今すぐ加盟という方針にはならない。

B 国労は全労協の生みの親、要なんだから、「課題別共闘の原則に基づき」なんていわれると、たいへん心もとない。連合は「全労連、全労協ともに『反連合』で結集、共同行動しない」といつてるんだ。労働組合員が望む方針を掲げればいいのにな。

C それが疑心暗鬼を生むことになるんだよね。とくに国労組合員は高齢だから、国労は組織を拡大するほかない。だから、労資協調の二労組にたいし、「国労らしさ」をどう確立するかが、最大の課題となる。

(つづく)

国鉄分割 民営化のツケ

— JR北海道 事故多発の真因 —

今日（八月一〇日）の札幌は雨の降りそうな、しかし何とかもちこたえているような曇り空です。みなさんのところはどうか。特に七月八月に入って猛烈な暑さ・強風・大水害等で被害にあわれた方がおりましたら、心よりお見舞いを申し上げます。

「JR北海道の事故多発・重大事故の危険性が大」は今、北海道民の大きな関心事になっています。「北海道新聞」は連日大きく報じ続けております。その中から考えなければならぬことをメモしてみました。

投稿

まず冒頭に「北海道新聞」（二〇一三年八月六日付け）の「読者の声」に載った、松島さんの投稿を紹介します。

「相次ぐJR事故 国鉄分割のツケ JR北海道の事故、トラブルが続いている。利用する乗客の不安、不満は高まるばかりだ。一連の事故の発生は、いわゆる団塊の世代が定年退職してから、次々と起きていくように感じる。これは現場の技術が正しく継承されていないからではないだろうか。一九八七年四月の国鉄分割民営化のツケがここへ来て表れているのだろう。あの当時、国鉄の中でも、特に北海道の組合弾圧が激しかったように思う。国労に所属しているというだけで、多くの優秀な技術者が首を切られたのではなかったか。

民営化後のJRになってから採用された社員は、国鉄時代とは違うのだという意識を強くたたき込まれたために、国鉄時代に蓄積された現場技術を正しく受け継ぐうとしなかったのではないか。国鉄時代に採用された現場技術者の大量退職と最近の事故多発がつながっているように思えてならない。」

私は松島正道さん（六九歳・旭川市）のこの文を三回読んでから威儀を正しつつその気持ちを以下の短文にしました。

松島さん 毅然・悠然 胸を打つ 国鉄分割 ツケ真実（まこと）告げる（語る）
松島さんは毅然・悠然として「三六五文字」（読者の声）は四〇〇字程度）の中に「相次ぐJR事故 国鉄分割のツケ」として、「JR北海道」における事故多発、まさに死傷事故を伴う大事故発生の危険性が大きくなっていることへの強い「警鐘乱打」されていることを、読みながら肝に銘じ実感することが出来ました。

気持

「JRは危険でイヤだ、乗りたくない」これが率直なる北海道民の気持です。

JR北海道の事故が多発し、それが極めて長く続いていることに関して、私・松里福慈（六九歳・元国鉄労働組合員）にとっては、「安全をないがしろにしているのではないか」というよりも「安全をないがしろにしている」と、あえて断じざるを得ない現状を看過することはできません。

私と妻は家庭の事情もあり緊急の場合を除いては、この十数年間まったく札幌から

遠出（とおで）はしませんし、JRを利用するのは年に一〜二回（旭川駅・妻の実家の剣淵（けんぶち）駅・名寄駅）位です。そういう二人ですが、相当長く続いている「JR北海道の事故多発」に関して、とくに妻は「こんなに危険なのだからJRはイヤだ。乗りたくないね…」と言っています。

年に一〜二回しか乗らないのに？ しかし、このような率直なる気持が北海道民の現実の声であることも事実なのです。JRを頻繁に利用されている人の気持ちを考えると「胸が痛む」とともに、「JR北海道における安全運転」はまさに急務であり「全北海道民が熱望」していることだと思えます。

報道

「JR北海道」の事故多発とその現状については、テレビはもとより地方紙・北海道新聞において、連日事故の現状・経過と「JR北海道の問題点」を具体的にかつ詳細にとりあげ報道しています。「道新」は日刊紙ですので、毎日の記事がたいへんわかりやすく「JRの本質を見抜いている」ことは、左記の「鉄路の安全どこへー組織の縦横深い溝へ進む外注化・会議ばかり・悲劇人ごと」（七月一八日付）によくまとめられています。

「札幌市東区にあるJR北海道の社員研修センターに、『安全研修室』と呼ばれる一室がある。壁面には何枚もの写真パネル。脱線や衝突でゆがんだ列車の姿が生々しい。そこは同社の『失敗の歴史』の展示場だ。過去の事故の教訓を伝え、社内安全教育に生かそうと二〇〇七年に開設。今年四月からは近くの一角に、一昨年五月の脱線炎上事故で焼け焦げた特急スーパーおおぞらの車両の一部も展示された。多い年で年間二千人近い社員が、研修でこの場を活用する。

赤茶け無残に変形したおおぞらの姿。目にした社員は『事故を忘れない』と誓わずにいられないはずだ。だが、こうした取り組みとは裏腹に、皮肉にも石勝線事故の後、同社で事故・トラブルの連鎖が止まらない。社内で何が起きているのか。

長く技術畑で過ごし、現場を離れて久しいJR幹部は近年、車両整備工場での仕事のやり方を聞きたび胸を痛めていたという。

進む外注化 車両の定期点検では、それぞれパーツの分解などは下請け業者が担当し、本社の整備部門の担当者が準備された部位を点検し、組み立てる流れ。幹部は、分解など油で手を最も汚す仕事をしてこそ問題点が見える、として『今のやり方は医者が診察も検査もせず、いきなり手術するようなものだ』と言う。

JRは旧国鉄時代から職種による『縦割り』が根強いが、近年、人員削減に伴う外注化の進行で、組織内を縦に走る溝はより深まり、本数も増えていると、この幹部は指摘する。

会議ばかり 組織の上下を隔てる横方向の溝の深まりを嘆く関係者もいる。ある五〇代社員は『今の上司たちには、現場の声を吸い上げる意思が見えない』と話す。

この社員の身近で数年前、車両の操作ミスが発覚した際、会社は操作の確認作業の回数を増やすことを現場に命じた。『なぜミスが起きたか、現場と意思疎通をしつつ

原因を探るのではなく、ただ確認回数だけを増やす。それでいいのか』

相次ぐ事故・トラブルの影響か、社内で会議ばかりが増えたとの声もある。『事故は現場で起きているのだから、会議室で上からの目線で解決策を探してもだめだ』。先の元技術畑の幹部も、組織の縦割りだけでなく『横割り』が進んでいることを実感するという。

悲劇人ごと JR北海道の社員の年代構成は現在、二〇代が二七%、三〇代が二三%、五〇代の三八%に対し、四〇代が一〇%と極端に少ない。一九八七年の国鉄民営化前後に採用を抑制したためだ。中堅世代の少なさも、技術や知恵の伝承を滞らせ、上下を分かつ要因の一つになっている。

二年前の石勝線事故では、安全対策の陣頭指揮を執っていた中島尚俊社長（当時）が自ら命を絶った。だが、ある社員は、『あれほどの悲劇にもかかわらず、人ごとのような社員も少なくなかった』と振り返る。

縦と横の両方向にわたる組織の分断。進まない危機感の共有。『石勝線事故の時に『JR発足以来で最悪の事態』と言われた。今はそれどころではない。崖っぷちだ』。勤続三〇年を超えるベテラン社員はつぶやいた。

道内の鉄路を担う約七千人の巨大組織がもがいている。

JR北海道で起きた最近の事故・トラブル 二〇一一年五月二七日には、上川管内占冠村のトンネルで石勝線『特急スーパーおおぞら14号』が脱線炎上。乗客ら約八〇人が重軽傷を負った。昨年九月と今年四月、今月六日には、いずれも『特急北斗』のエンジンから出火するなどの事故・トラブルが発生。三回とも燃料噴射ポンプ内の『スライジングブロック』と呼ばれる同じ部品が破損していたことが判明している。今月一五日には、北広島市を走行中の『特急スーパーおおぞら三号』の配電盤から出火。これでJR北海道の出火・発煙トラブルは今年に入り計六件目となった。

自問

「JR北海道」でまさに「重大事故・死傷者を多数発生させない・起きない」ように、「乗客の生命を守る」安全運転・列車の点検・整備・修理・線路の保守・貨物の安全輸送」等全てにおいて「JR北海道」はもとより、その「要・かなめ」となる当該組合の「国鉄労働組合」の役割と任務はまさに重大であり、「国鉄労働組合員をはじめ、JR各社の労働者のいのちと権利、生活を守る」とはもとより、是非とも「乗客の生命・安全を守るための列車の運転、貨物輸送の安全運転」等にしっかりと頑張っ欲しい…と切に願っています。と同時に心ある「北海道民も起ち上がり、怒りの声を出していくこと」が今強く求められています。自分に何が出来なのか、元国鉄労働者・元国鉄労働組合員として自問自答しつつ日々深く考えているところです。

「国鉄闘争Ⅱ解雇撤回闘争」の検証とは！総括とは！…このことについて、その重要・重大なる課題がこんにち「JR北海道における安全問題・事故多発：重大事故の危険性」に集中・集約されているのではないか…との思いを強くしているところです。

（元国労組合員・松里 福慈）

◇ 読者からのおたより ◇

ＴＰＰの影響 北海道議会議員である池本柳次さんの道政報告があり北海道のエネルギー問題やＴＰＰが締結されたらどうなるのか等、幅広い内容で話がされました。ＴＰＰについては、当初自民党は導入に反対を表明していました。その後だんだんと変節し、推進派になってきました、安倍首相は反対する人たちの答えに、「国益にならないと撤退する」と言っていました。本当は「いったん交渉のテーブルにのると撤退は出来ない」「交渉の内容は周知できないルールになっている」。北海道は地域上、ＴＰＰは農業だけの問題のように捉えられている雰囲気ですが、医療現場にも大きな影響が出るようです。ＴＰＰに参加すると、混合医療の解禁、それにより保険外診療の増大や医療格差の拡大につながる。営利目的の病院経営が認可される。それにより、全てがコスト重視になり質の低下になる。

(帯広・みんな)

編集より おごる安倍に「逆風」が襲いかかるのはこれから。メディア操作のウソはばれる。**増減ゼロ** 音威子府は一雨ごとに涼しくなっています。もう秋でしょうが：暑い暑いといっていた短い夏も過ぎ、もう三ヶ月もすれば雪景色となってしまいます。滝野さんの学習会の成果で一部増えたのですが、一人やめたといの申し出で一部減、増減ゼロになってしまいました。また、学習会をやりたいと思いますので、その時はぜひ。(音威子府・杉山均)

編集部より よくあることです。気になさいます。今号の「エンゲルスの告白」のように「楽しくやろうぜ」でまいりましょう。バック旅行は安い。いつでも手弁当で訪問したい。よろしく。

学習会 地域学習会で行っている現在のテキストが終わります。新しいテキスト、通信で話題になった伊藤誠さんの新書でやってみましょうか？ 討論が楽しみ。残金はカンパです。(山梨・Ｕ) **編集部より** お住まいの山梨県富士吉田市は富士山への登山口でしたよね。町のようすは変わりましたか。学習会、私も参加させていただきますよ。

退職 退職年齢六十五歳まで二年三ヶ月残り、退職することとしました。「進路」時代からの読者でした。六月末をもって国労組織を離れ、北海道に帰ることになりました。通算四十五年におよぶ鉄道生活でしたが、闘いの主戦場はいつも、常に現場です。これまでの闘いに学び今後の人生に生かしていきたいと思えます。帯広時代からの今日までの御礼にかえます。(藤沢・Ｔ)

映画祭&小出講演会 小出裕章講演会(9月15日13時30分)の成功にむけて集中しているところです。リーフを同封します。小出講演会は新得町公民館で、他は新得町新内(にんない)ホールで開催します。新得だけでは参加者が限られますので、帯広・十勝の多くの方にも宣伝しているところです。隣の占冠村や南富良野町の仲間にも連絡を取りました。(北海道新得町・佐野 周二)

編集部より 「空想の森映画祭」は十八回目、九月十四日〜三日間、前夜祭も小池照男さんをゲストに始まりヒロシマ平和映画祭特集、九月十五日の小出講演会、沖縄や戦争をテーマに行われます。小出講演会のと趙博(浪花の歌う巨人)さんのライブがなんと二時間も。僕も行きたい。

プログラムの詳細は「空想の森映画祭」公式サイト <http://www.kuusonomori.com/program/>

オスプレイ来るな! 日米合同軍事演習反対! 9・29 あいば野集会 本年一〇月上旬より下旬まで、あいば野自衛隊演習場および陸上自衛隊今津駐屯地で十三回目の日米合同軍事演習が強行されるようとしています。問題点は何よりも、米軍の欠陥機・オスプレイを使用した日本初の日米合同軍事演習となることです。米軍と自衛隊は「フォレスト・ライト」という約二週間の合同軍事演習を予定している模様で、上空で停止しているオスプレイから隊員がロープで降下し陸上に展開する「ヘリボーン」や「陣地攻撃」という呼称の訓練を実施すること。これに市民は「強い怒りを覚える」と多くの不安と反対の意志を表明しています。合同軍事演習中はオスプレイの拠点を米軍岩国基地に移して、「沖縄の負担軽減」を口実に、オスプレイ使用の全国化・既成事実化をはかろうとしています。八尾空港でのオスプレイの訓練、二〇一五年のオスプレイの自衛隊への導入、近畿初の米軍基地となる京都丹後・経ヶ岬のXバンドレーダー設置も画策されています。ごぞって反対集会にご参加下さい。

▽日時 9月29日(日)(集会) 14時〜15時、(デモ) 15時40分くらいまで

▽場所 滋賀県高島市今津町「住吉公園」(JR湖西線近江今津駅より徒歩3分)

▽主催 フォーラム平和・関西ブロック/2013あいば野に平和を! 近畿ネット

▽特別報告 沖縄の平和フォーラムと京都・丹後のXバンドレーダー設置反対運動より

「2013あいば野に平和を! 近畿ネット」事務局・稲村守(9条ネット・滋賀事務局長)